

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：13904

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02085

研究課題名(和文)消費社会論の再構築と倫理的消費の再定位：物質性の哲学の社会学的応用の試み

研究課題名(英文)Reconstruction of the theory about consumer society and reformulation of ethical consumption

研究代表者

畑山 要介(Hatayama, Yosuke)

豊橋技術科学大学・総合教育院・准教授

研究者番号：70706655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、物質性の哲学の展開を社会学に導入することで消費社会論を理論的に刷新し、記号理論とは異なる仕方です「モノの倫理的消費」を再評価することを試みた。「消費社会論研究会」において、エシカル消費の快楽性、ショッピングの道徳性、プロシューマー、消費者運動の内部化、産消提携の展開、プラスチック使用規制の実践、ミニマリズムの思想、用の美の商品化といったテーマを深化させるとともに、「下からの啓蒙」という図式で総合的に検討を加えた。こうした帰結は物神崇拜(フェティシズム)の再考を促す。消費社会批判を物神打破から物神構築として転換する新たな理論刷新が提起された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第1に持続可能な経済における消費社会のあり方の理論的視座を開示するという点にある。枯渇するエネルギー資源のなかで、GDP増大とは異なる幸福のあり方を追求する上でのありうべき人とモノの関係を示すのが本研究である。また、第2に消費者庁を軸に政府が現在検討している倫理的消費の諸政策について、よりよい政策を提案することに貢献するという点も挙げられる。物質的禁欲とは異なる仕方です「市民」のあり方を考えていくことが本研究の射程に含まれる。第3に、実在性を問い直す社会学の今日の潮流のなかで、消費社会論を新たに位置付け直すという点にある

研究成果の概要(英文)：This study attempts to theoretically renew consumer society theory by introducing the development of the philosophy of materiality into sociology, and to reevaluate the "ethical consumption of goods" in a manner different from that of semiotics. We deepened themes such as the hedonistic nature of ethical consumption, the morality of shopping, prosumers, the internalization of the consumer movement, the development of alliances between production and consumption, the practice of regulating plastic use, the philosophy of minimalism, and the commodification of the beauty of use, and comprehensively examined these themes from the perspective of the "Enlightenment from Below".

These consequences encourage a reconsideration of fetishism. A new theoretical renewal was proposed to shift the criticism of consumer society from the destruction of fetish to the construction of it.

研究分野：社会学

キーワード：消費社会 倫理的消費 物質性 消費者運動 ミニマリズム プロシューマー 産消提携 物神崇拜

1. 研究開始当初の背景

現在、文化人類学や考古学や脳神経学の側から「物質性 (materiality)」に関する理論と歴史の豊かな学際的研究が展開しており (Malafouris 2016)、この新たな知のうねりを受けて、消費社会論でも物質性に関する重要な諸研究が刊行されてきた。他方で、日本ではかかる新たな研究動向をほとんど検討していない点に研究のギャップがあった。今日の消費社会論における重要な研究課題は、まずもって英語圏での新たな動向を踏まえた上で、かかる理論的資源に照らして人間とモノの関係を捉え返すとともに、さらにそこから倫理的消費の倫理性を新たに検討することにある。

というのも、倫理的消費に関する英米圏の倫理的消費研究の動向に目を向けて見ても、義務論と帰結主義の対立を超えて倫理的消費を評価する必要性や、禁欲ではなく人間欲求や能力との相関においてそれを捉える必要性が論じられるなど、従来の枠組みとは異なる新たな理解モデルが求められているという現状がある (Barnett et al., 2005; Soper and Trentmann 2008)。ここでは、倫理的消費がモノの否定ではなくモノに対する高度な意味付けの結果であることや、またモノとの関係が社会や環境への配慮を誘発することなどが論じられ、物質性と倫理の関係をめぐる問題はますます重要性を帯びている。倫理的消費はモノへの無関心や忌避によってではなく、自らの世界を「意味あるモノ」によって再構成しようとする積極的関心によって促進されているのではないだろうか。だとすれば、消費社会の変容は「脱物質化」というよりもむしろ「人とモノの関係の再編」として位置付けられうるのではないだろうか。

本研究の核心をなす問いは、私たちの消費社会は全体としていかにして人間の能力を拡張する方向に向かうことができるのかという問いであり、この問いを通じて、環境問題に直面する現代人が倫理的たりうる消費行動を新たな視点から検討していく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、物質性の哲学の展開を社会学に導入することで消費社会論を理論的に刷新し、記号理論とは異なる仕方です「モノの倫理的消費」を再評価することである。【1】「脳を拡張する機能としてのモノの意義」と【2】「モノの消費行動における倫理性」の2つの研究プログラムを推進していく。前者は2000年代以降の学際的研究が明らかにしてきた「物質性」の諸理論を検討しつつ、それが既存の消費社会理論にもたらす批判的意義を解明するという試みである。後者は戦後日本の市民的消費者運動において問題化された「消費の倫理性」について、これを新たな視点で評価するという試みである。

本研究の独自性は、第1に物質性の哲学という先端的な海外の学術動向に着目し、その理論資源を社会的な知の創造に組み込むという点にある。物質性が人間を疎外するという見方がある一方、物質性が人間の脳の働きの制約を拡張する側面があり、本研究ではその側面からモノの消費を通じた文化的創造や共同のアイデンティティの構築を捉えていく。

本研究の独自性は、第2に倫理的消費の台頭が脱物質化と結びついているという従来の見方を覆し、むしろ人とモノとの関係の再編のなかでそれを捉え返すという点にある。倫理的消費の台頭は、人々がもはやモノにこだわらなくなった帰結としてではなく、むしろ自らにとって「意味あるモノ」によって生活を再構成しようとする物質性への反省的な関与の高まりとして捉えられるだろう。モノとの拡張的な関係性を通じて社会や環境、他者に配慮するという新たな理解が与えられることになる。

3. 研究の方法

本研究は2つのサブユニットによる研究プログラムの相互往復のなかで推進される。それぞれのユニットにおいて理論的分析と経験的分析が同時並行的に進められる。

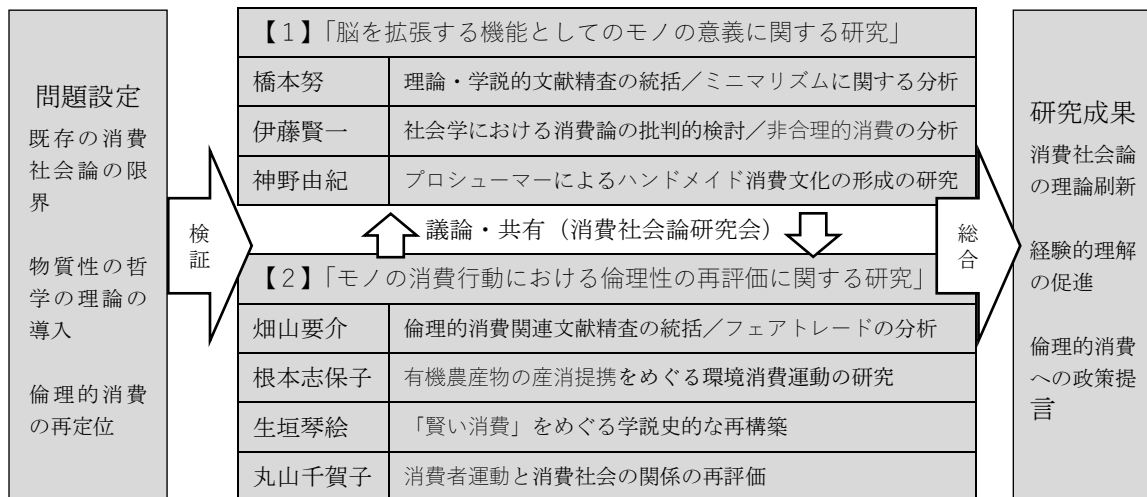
(1) 「脳を拡張する機能としてのモノの意義に関する研究」ユニット

海外文献の精査を通じて物質性をめぐる学際的な研究の展開を把握するとともに、プロシューマー (生産する消費者) やミニマリズムに対する具体的な経験的現象のなかでそれを検証していく。理論的にはまず認知科学者ランブロス・マラフォーリスの物質関与論 (Malafouris 2016) に着目しながら既存の消費社会論を刷新する検討をおこなっていく。マラフォーリスによれば、モノは「脳の働きの制約を拡張する道具」であり、人とモノの間にあるのは存在論的隔りではなく「志向性とアフォーダンスとで構成された絡み合い」である。これはモノと人との相互的なネットワークの中で「意味」が形成されていくという視点であり、消費論ではダニエル・ミラーが類似の視点から分析を展開してきた (Miller 2001)。また、ブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク・セオリー (Latour 2005=2019) も、消費研究に導入していく。モノと人のハイブリッドなネットワークを想定するこの理論を通じて、人間中心であった消費論の方向転換の可能性が探られる。これら理論を通じて、ボードリヤールの記号消費論の限界を超えて、モノ消費の意義について検討していく。理論分析に関しては研究会での発表を通じてサブユニット内での協働によって進める。また人とモノの関係の再編をめぐる個別の経験的対象のなかで、そ

の理論を検証しつつ発展させていく。

(2) 「モノの消費行動における倫理性の再評価に関する研究」ユニット

倫理的消費や消費者運動をめぐる海外文献の精査、および国内におけるフェアトレードや産消提携運動などの動向を分析することを通じて、モノの消費の倫理性を物質性の観点から再評価する理論的枠組みを構築していく。倫理的消費をめぐる新たな理解モデルの必要性という状況へのひとつのアプローチとして前述の物質性の哲学を位置付け、新たな理論認識を形成していく。ケイト・ソパーの快樂主義の観点からの倫理的消費論 (Soper and Trentmann 2008) は、そのひとつの軸である。ソパーは、環境や社会への配慮を「豊かさ」の追求する人間の繁栄として再評価する。さらにそれを物質性の観点からとらえ直すこともできる。戦後日本の市民運動のなかで行われてきたのは、「モノによる人の疎外」への批判というよりも「人とモノの拡張的関係の制約」に対する異議申し立てであったと捉え直すことができ、その視点から消費者市民社会における賢い消費あるいは自立した消費のあり方に展望を開示していく。そうした以上を研究会での議論を通じて理論的に深化させていく。



サブユニットにおける役割と研究プログラムの全体像

4. 研究成果

本研究の第一の研究成果は主に橋本努編『ロスト欲望社会』(2021)に取りまとめられるとともに、その後の検討を経て発展した学会発表、学術論文で公表されている。本書の具体的な成果は以下の通りである。

- (1) 消費理論の最前線：ケイト・ソパーやダニエル・ミラーの理論的研究
ソパーは今日の消費文化における快樂の質の進化論的な変化を強調し、ミラーは道徳の復権を捉えようとする。両者の研究を日本で紹介するとともに、これらに対する検討や展開をおこなった。
- (2) 家庭を超えて：プロシューマーの登場や消費者運動の展開の研究
家(オイコス)の外部で生産・消費が営まれていく過程として近代の変化を捉えた。手作り(ハンドメイド)の位置づけが家庭内使用から、他者との交流やマーケットでの売買が中心となっていく現状を捉えた。また消費者運動が、市場と政府の外部という基点から、その後の融和の中で、適格消費者団体制度を経て、消費者庁設立として消費者運動が政府に内部化されていく過程を捉えた。
- (3) 環境への配慮：産消提携やプラスチック製品使用の研究
市場と政府に対するオルタナティブな試みとして、産消提携運動に着目し、「消費を通じて生産者の労働を支える」という倫理的消費の先駆けとして、産消提携団体が政府と市場の両方から独立した第三の領域に、消費生活の基盤を築いていった過程を明らかにした。また海洋プラスチック問題の現状に焦点を当て、市民社会におけるその実践例について検討をおこなった。
- (4) 顕示しない消費の台頭：無印良品やミニマリズムに関する研究
消費社会への批判の基点の内部化が進んでいる。ミニマリズムの思想のなかに「下からの啓蒙」を捉えるとともに、無印良品の製品開発における「用の美」に着目しながら、シンプルな消費生活について理論的な検討をおこなった。

こうした代表者・分担者の共同研究における成果を、物質性の哲学との関連で代表者がさらに理論的に検討したのが第二の成果である。特に、研究の過程で新たに出てきた着想が、消費社会

を駆動させる「物神崇拜」(フェティシズム)について再検討を行うことであった。そこで、ブルノー・ラトゥールの物神事実崇拜(Latour 2009=2017)の概念を中心に、物の物神性と倫理的消費の関係をめぐって研究を進めた。マルクス以来、物神崇拜の概念は、商品への欲求を虚構・倒錯に過ぎないとして消費社会を批判するキーワードとして使用されてきた。だが、ラトゥールは〈物神事実〉という造語によって、物神と事実は切り分けられないと主張し、物神を虚構としてではなくリアリティの構成原理として捉える。本研究では、この〈物神事実〉(ファクティッシュ)という視点転換を消費社会論に導入し、倫理的消費やサステナブルな消費と呼ばれる消費の在り方を、あらためて位置付け直した。そうすると、倫理的消費は「消費社会の物神崇拜の打破」であるかのように考えられてきたが、しかし実際には逆であり、新たな物神崇拜として捉えられなければならない。それは倫理的消費を「所詮は虚構に過ぎない」として批判することではなく、環境や社会への配慮そのものが〈物神事実〉の構築として捉え直されねばならないという視点転換を提供するものである。

以上の研究成果は、ボードリヤール以来の消費社会論の理論的枠組みを大きく刷新するものである。記号消費論の立場から実在性を否定し豊かさを「虚構」とするボードリヤール理論とは異なり、この新たな消費社会論では、消費実践における「下からの啓蒙」によって実在性が構築されている在り様を捉えることができる。本研究を経て、消費社会批判は物神打破の理論から物神構築の理論へと大きく転換することになる。これは、実在性を問い直そうとする哲学、社会学の今日の潮流においても、ひとつの重要な契機となるように思われる。

【参考文献】

- Barnett, Clive, et al., 2005, "The Political Ethics of Consumerism" *Consumer Policy Review*, 15(2).
- Knappett, Carl, 2011, *Archaeology of Interaction*. Oxford University Press.
- Malafouris, Lambros, 2016, *How Things Shape the Mind: A Theory of Material Engagement*. The MIT Press.
- Miller, Daniel, 2001, *The Dialectic of Shopping*, The Univer of Chicago Press.
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the social: An introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press. (=2019, 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.)
- Latour, Bruno, 2009, *Sur le culte moderne des dieux faitiches, suivi de Iconoclash*, La Découverte. (=2017, 荒金直人訳『近代の〈物神事実〉崇拜について——ならびに「聖像衝突」』以文社.)
- Soper, Kate, and Frank Trentmann, 2008, *Citizenship and Consumption*. Palgrave macmillan.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 畑山要介	4. 巻 88(4)
2. 論文標題 食と社会正義を架橋する道 エシカル消費を経由したフェアトレードで形成する「食の市民」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 236-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 51(2)
2. 論文標題 贈与投資説	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 172-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 92
2. 論文標題 自由主義についてのフランスと日本の対話	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 127-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑山要介, 寺島拓幸, 藤岡真之, 野尻洋平, 畑山直子	4. 巻 44
2. 論文標題 社会的ミッションをもったコーヒーロースター——オレゴン州ポートランドの事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雲雀野	6. 最初と最後の頁 33-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 85
2. 論文標題 ウェルビーイングとナッジ政策 自律のオプション化について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 公衆衛生	6. 最初と最後の頁 831-835
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神野由紀	4. 巻 1
2. 論文標題 マーケティング史からみた日本の初期百貨店	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 マーケティング史研究	6. 最初と最後の頁 96-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本志保子	4. 巻 63
2. 論文標題 一樂照雄の社会経済思想と日本の有機農産物「産消提携」運動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 経済学史研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑山 要介	4. 巻 42
2. 論文標題 倫理的消費ともうひとつの快樂主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済社会学会年報	6. 最初と最後の頁 55 ~ 65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15081/soes.42.0_55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 畑山 要介	4. 巻 49
2. 論文標題 経済の自己制御としての社会・環境認証の普及—N.ルーマンの機能分化論を通じて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学年報	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本努	4. 巻 2020年12月号
2. 論文標題 資本主義の精神とは何か ウェーバー「プロ倫」の読み方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nemoto, Shihoko	4. 巻 51
2. 論文標題 Socio-economic Thought of the Teikei Movement and the Early Organic Agriculture in Japan: Overcoming 'Natural and Human Alienation'	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Bulletin of Research Institute of Economic Science College of Economics Nihon University	6. 最初と最後の頁 107-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 神野由紀	4. 巻 83
2. 論文標題 DIYインテリアをめぐる実践と趣味に関する考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 畑山要介
2. 発表標題 エンカル消費に対する脱成長意識の影響 第5回消費とくらしに関する調査(2)
3. 学会等名 日本社会学会大会一般報告
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野由紀
2. 発表標題 戦後日本のインテリアデザインとジェンダー
3. 学会等名 日本デザイン学会第69回春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野由紀
2. 発表標題 DIYインテリアをめぐる実践と趣味の現状 消費者としてのデザインからの脱却を通して
3. 学会等名 意匠学会第250回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 畑山要介
2. 発表標題 消費と労働の脱成長
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 畑山要介
2. 発表標題 フェアトレードの展開と倫理的市場の形成 社会・環境的配慮の市場化をめぐる社会学
3. 学会等名 経済社会研究フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 畑山要介, 小田和正, 鈴木康治, 橋本努
2. 発表標題 【ラウンドテーブル】ロスト近代の消費文化：道徳と倫理・無印良品・ミニマリズム
3. 学会等名 経済社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本努
2. 発表標題 ミニマリズム：新しい消費の思想とは
3. 学会等名 シノドス・トークラウンジ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本努
2. 発表標題 新しいリベラルとはだれか
3. 学会等名 Lunch Seminar on Japanese Economy and Society, Institut francais de recherche sur le Japon a la Maison franco-japonaise (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金澤悠介, 橋本努
2. 発表標題 「社会意識の分断」という観点から見た現代日本の政治意識の構造
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本努
2. 発表標題 ロスト欲望社会～エコ・ミニマリズムのすすめ
3. 学会等名 第27回日本EVフェスティバル(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本努
2. 発表標題 ロスト欲望社会と消費ミニマリズム
3. 学会等名 NPO法人「環境文明21」全国交流大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本努
2. 発表標題 日本とフランスのあいだのリベラリズムの対話
3. 学会等名 Conversation sur le liberalisme entre France et Japon(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 嵯峨生馬, 坂口 緑, 橋本努
2. 発表標題 第1部 基調鼎談「2030年 日本社会のアジェンダ」
3. 学会等名 ソーシャルアクションタンク シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 根本志保子
2. 発表標題 岡田米雄の社会経済思想と1970年代の産消提携運動 - 「消費者と農民の自給農場」構想と自然・人間疎外 -
3. 学会等名 経済学史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根本志保子
2. 発表標題 岡田米雄の疎外論と消費者自給農場 - 産消提携事業モデルの環境経済思想
3. 学会等名 日本有機農業学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根本志保子
2. 発表標題 食と環境の提携運動への参加動機と消費者倫理 日本とオランダの消費者4団体のインタビューデータから
3. 学会等名 日本有機農業学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 畑山要介
2. 発表標題 商品としてのエシカルー近代における新たな 物神事実 崇拜について
3. 学会等名 経済社会学会第59回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shihoko Nemoto
2. 発表標題 Teruo Ichiraku 's Moral Economy through face-to-face relationship - Ichiraku 's thoughts with its genealogy and evaluation of his association-typed small ethical economy from the perspective of the commons
3. 学会等名 The 2nd IVR Japan International Conference
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 生垣琴絵
2. 発表標題 「女性と経済学」という問題圏
3. 学会等名 経済理論学会ジェンダー分科会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤賢一
2. 発表標題 ローザ理論における疎外された消費論
3. 学会等名 第96回日本社会学 会大会テーマセッション「時間社会学」と社会学的時間批判」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 丸山千賀子
2. 発表標題 海外の消費者団体の現状と政策的役割
3. 学会等名 第399回消費者委員会本会議有識者ヒアリング
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 橋本努	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 181
3. 書名 Liberalism and the Philosophy of Economics	

1. 著者名 丸山 千賀子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開成出版	5. 総ページ数 202
3. 書名 消費者問題の変遷と消費者運動 - 消費者政策の基礎 改訂版	

1. 著者名 橋本努編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 ロスト欲望社会	

1. 著者名 橋本 努	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 消費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神	

1. 著者名 筒井清忠編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 35
3. 書名 大正史講義【文化篇】（神野由紀「百貨店と消費文化の展開」）	

1. 著者名 ジョナサン・H・ターナー、（訳）正岡 寛司、山田 真茂留、畑山 要介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 432
3. 書名 社会学の理論原理 Vol.1：マクロダイナミクス	

1. 著者名 橋本 努	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 334
3. 書名 自由原理 来るべき福祉国家の理念	

1. 著者名 那須 耕介, 橋本 努, 吉良 貴之, 瑞慶山 広大	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 87
3. 書名 ナッジ! したいですか? されたいですか? される側の感情、する側の感情	

1. 著者名 那須 耕介、橋本 努	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 ナッジ!?: 自由でおせっかいなリパタリアン・パターンリズム	

1. 著者名 圓山 茂夫, 穴井 美穂子, 井上 博子, 川口 美智子, 白崎 夕起子, 松原 由加, 丸山 千賀子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 民事法研究会	5. 総ページ数 121
3. 書名 実践的消費者読本 第6版	

1. 著者名 橋本 努	4. 発行年 2024年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 「人生の地図」のつくり方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ロスト欲望社会

<https://sites.google.com/view/hashimoto-tsutomu/research/books/lost-desire-society?authuser=0>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 努 (Hashimoto Tsutomu) (40281779)	北海道大学・経済学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	丸山 千賀子 (Maruyama Chikako) (20324965)	金城学院大学・生活環境学部・教授 (33905)	
研究分担者	根本 志保子 (Nemoto Shihoko) (70385988)	日本大学・経済学部・教授 (32665)	
研究分担者	伊藤 賢一 (Ito Kenichi) (80293497)	群馬大学・社会情報学部・教授 (12301)	
研究分担者	神野 由紀 (Jinno Yuki) (80350560)	関東学院大学・人間共生学部・教授 (32704)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	生垣 琴絵 (Ikegaki Kotoe) (90646093)	日本大学・法学部・講師 (32665)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	小田 和正 (Oda Kazumasa) (50972808)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関